

日本に自生するミヤマヨメナの分布と自生地による形態的差異

教育学部自然観察実習地 重岡廣男

はじめに

キク科、ミヤマヨメナ属のミヤマヨメナ (*Miyamayomena savatieri* (Makino) Kitam.) は、日本原産の多年草で、山地の林内に自生し、5月から6月にかけて淡い紫色ないし白色花を開花させる。ノコンギクやヨメナなどのノギク類は秋に咲くが、ミヤマヨメナは春に咲くことから、別名をノシュンギク (野春菊) と呼ばれる。この花の園芸品をミヤコワスレ (都忘れ) といい、古くから茶花や生け花などで鑑賞され親しまれてきた (10, 15)。ミヤコワスレという呼び名は、承久の乱 (1221 年) に敗れた順徳院が佐渡に流島中に詠んだ和歌に由来すると言われている (2, 16, 17)。

ミヤマヨメナは、洋花にない落ち着いた清楚な風情が味わえる極めて日本的な草花であり、次世代に受け継がれていくべき貴重な野生植物資源と思われる。現在のところ絶滅危惧植物にはなっていない (13) が、静岡県のように以前は自生していたが今はみられない (14) という事態が他県においても生じる可能性があり、保護したい植物である。野生植物を保護するには、自生地やその環境、自生地ごとの形態的特徴などを把握しておく必要がある。しかしながら、ミヤマヨメナの自生地については、本州や四国 (5)、箱根以南の本州、四国、九州 (1, 10, 11)、あるいは、本州、四国、九州 (4, 6, 7) などと文献によって記述が異なる。こうした資料では、各都道府県におけるミヤマヨメナの自生地が確認できないばかりか、全国的な分布状況や北限および南限についても知ることはできない。また、これまでの資料 (5, 6, 7) では、総括した内容で形態的特徴が記述されていることから、異なった自生地における草丈や花器の形態的特徴を知ることができない。さらに、自生地における環境条件については全く不明である。

そこで、上述した点に関する基礎資料を得る目的で、本報では各都道府県などで発行している植物誌や野生植物研究者からの情報をもとに全国におけるミヤマヨメナの自生地を調査し、その資料を基に分布図を作成した。また、数カ所の自生地において自生状況やそこでの特徴を調査した結果、二、三の知見を得たので報告する。

調査方法

ミヤマヨメナの自生地を、1998 年から 1999 年にかけて、各都道府県などで発行している植物誌や野生植物研究者、愛好者などの情報を基に調査した。これらの資料や情報は、国立大学や各都道府県の研究機関、野生植物研究者、愛好者などから提供を得た。自生地は、当該県で発行している植物誌などに記載されているか否かで確認した。自生地は極力、市町村名で示したが、高原や山の名で示したほうが適切と思われる場所についてはそれに従った。なお、自生地名が植物誌等に記載されていても、当該県の野生植物研究者から園芸品種の逸出した可能性が提言された場合には、これを除外した。

ミヤマヨメナの形態と自生状況を、1999 年 5 月から 7 月にかけて現地調査した。調査は、新潟県新津市塩谷、福島県耶麻郡熱塩加納村、岐阜県益田郡金山町、同県郡上郡高鷲村、同県中津川市瀬戸、愛知県南設楽郡作手村、三重県伊勢市朝熊山、京都府京都市左京区久多町、愛媛県上浮穴郡久万町の 9 箇所において行った。なお、三重県伊勢市朝熊山では亜種のシュンジュギクについて調査した。調査は、開花時の草丈および花の径、舌状花数、舌状花長 (子房を除いた長さ)、舌状花幅 (舌状花の中位部の横幅)、管状花数、総苞片数、花色について行った。また、自生地周辺の植生や環境について観察し、自生地の土壌の pH と EC 値を定法により測定した。なお、自生地周辺の気温や降水量および積雪の有無については、近在の市町村役場などでその資料を得た。

結果

1. 全国の自生地とその分布について

自生が確認できた府県は、岩手、秋田、山形、福島、栃木、埼玉、長野、新潟、富山、石川、福井、岐阜、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知、福岡、熊本、大分の2府30県であった。なお、自生地が多数確認できた県は、秋田、新潟、富山、石川、福井、岐阜、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、岡山、広島、愛媛、高知であった。一方、植物誌に記載が見られない、自生していない、不明あるいは記載はあるが園芸品の逸出と判断され自生県から除外された都道県は、北海道、青森、宮城、茨城、群馬、千葉、東京、神奈川、山梨、静岡、佐賀、長崎、宮崎、鹿児島、沖縄の1道1都13県であった。

自生地の分布をみると、ミヤマヨメナは本州、四国、九州に自生し、その北限は秋田県、南限は熊本県であった。中部地方以北では日本海に面した諸県に点在することが多く、中部地方以南から九州にかけての諸県では、主に山間部に点在する傾向がみられた。

2. 自生地における現地調査

(1) 草丈と花器の形態について

草丈は、新潟県産、福島県産、岐阜県産、愛知県産で長く、京都府産、愛媛県産では短かった。花径においても、新潟県産、福島県産、岐阜県産、愛知県産で長く、京都府産、愛媛県産で短かった。草丈と花径が最も長かったのは、新潟県産であったが、舌状花数は他県のそれらと比べて少なかった。舌状花は、福島県産、岐阜県高鷲村産、愛知県産、京都府産が13枚以上あった。舌状花長は福島県産が、舌状花幅は岐阜県高鷲村産が長かったが、舌状花長、幅とも長かったのは新潟県産と岐阜県高鷲村産であった。管状花は、新潟県産、岐阜県高鷲村産、愛知県産、京都府産が40本以上あった。総苞片数は岐阜県高鷲村産と福島県産で多かった。花色は、新潟県産と福島県産が藤色、岐阜県金山町産、同県高鷲村、同県中津川産、愛知県産、京都府産ではやや薄い藤色、愛媛県産は白色を呈した。なお、三重県のシュンジュギクは、草丈、花器とも小型であり、花色は薄い藤色と白色の2種類が観察された。

(2) 自生状況と自生地周辺の環境について

本植物は、スギ、ヒノキ、トチノキ、クス、カエデなどの樹木の下で、近くに川などがあり、やや水気の多い土壌に局在して自生していた。同じ自生地内においても日光が入りにくい林内の奥地や逆に常に日光が当たりやすい場所には全く自生していなかった。

自生地周辺の最高最低の気温をみると、夏場と冬場の温度較差が著しかった。年間の平均気温は、ほぼ12°Cから15°Cであった。年間降水量は自生地によりその量は異なり、岐阜県高鷲村や三重県伊勢市朝熊山のような高所では多かった。積雪はいずれの自生地でもみられた。

自生地における土壌のECとpHは、いずれの自生地でもEC値は低く、pHは弱酸性を示した。

考 察

ミヤマヨメナは日本固有の草花で、日本人の身近にあった植物であるにもかかわらず、意外にもその存在が知られていない。ミヤマヨメナ属には3種があり、ミヤマヨメナ以外に朝鮮原産のチョウセンヨメナ((*M. koraiensis*(Nakai) Kitam.)と中国原産の*M. piccolii*(Hook. fil.) Kitam. がある(7)。これらの種は、以前はアスター属の植物として取り扱われていたが、種子(瘦果)に冠毛がないことから区別されて、アスターの近縁属であるミヤマヨメナ属に入れられている。また、本属の学名には従来 *Gymmaster* が使用されてきたが、命名上の先取権から、現在では本属の基準種の和名にちなみ *Miyamayomena* が用いられている(11)。

ミヤマヨメナの自生地は、秋田県を北限にして中部地方以北では日本海に面した諸県に点在し、関東およびその近隣の太平洋に面した諸県では確認できなかった。また、中部地方以南から熊本県を南限にした九州にかけての諸県では、山間部に点在がみられた。このように本報では自生地分布図の作成により、ミヤマヨメナの全国的な自生状況を

概括的ではあるが、一覧できる資料を得ることができた。こうした資料は、ミヤマヨメナを保護する際の基礎資料になるばかりか、本種の研究上有益な資料になると考える。

なお、自生地が確認されていない諸県の中で、静岡県（14）のように過去に自生した記録がある県では、確認されなくなった原因を明らかにすることが植物保護の観点から重要であり、これについては更に検討する必要がある。

自生地に関する資料の中には、第三者に自生地を容易に特定されないための配慮からか、地名が明確に記載されていない資料もいくつかあった。貴重な野生植物を保護しようとする立場からは、植物の盗掘や乱獲を防止するために、自生地を明らかにすべきでないという考え方もある。本報でもこうした点に配慮して自生地名を市町村単位で示した。しかし、自生種を積極的に保護あるいは育成していくためには、自生地を明かし、その貴重さを唱え、存在を多くの人に知ってもらうことも一つの方法と思われる。また、自生地が明らかになることによって、その自生地環境を知ることができ、保護や育成を行う際の基礎資料も得られやすいと考える。

ミヤマヨメナは、雑木林やスギ、ヒノキなどの樹木下で、近くに川などがある湿地に自生していた。しかし、同一自生地内でも日光が少ない林内の奥地や、逆に直射日光が長時間当たる場所には全く自生していなかった。このように本植物は、ごく限られた条件の場所に自生することが示され、これには以下に述べるように、温度、日照、土壤湿度などの環境要因が関係しているようである。

自生地における平均気温は 12°C から 15°C であり、この気温は自生地がみられない静岡県の 17.4°C（1998 年）に比べるとかなり低い。園芸品のミヤコワスレは夏季に冷涼な温度を好むことから（9）、自生種のミヤマヨメナもまた夏季の温度が低い場所に自生しやすいものと思われる。こうした点と関係して、自生地が河川の近くに多いことは、夏季でも河川周辺は水流によって気温が上昇しにくいために、好ましい温度条件が保たれやすいものと思われる。

なお、自生が確認されていない地域は、北海道や青森県のように冬季の気温が著しく低い所か、あるいは逆に太平洋に面した関東、東海、四国、九州の平野部のように夏季に高温が継続する所であった。こうした点から、本種は冬の低温期や夏の高温期が長い地域では自生しにくいのかもかもしれない。

自生地の日照については、直射日光が樹木などで遮られ、日中の植物体に散光程度の日光が当たるような条件であった。したがって、西日が長時間当たるような場所は自生地として不向きなのかもしれない。また、本植物は水気が多い場所に自生していることから、乾燥には弱いものと思われる。自生地としては落葉が多く堆積したところや、土壤湿度が年間を通して比較的高い所が適していると思われる。

また、自生地の土壤の pH や EC を調査した結果、本植物は弱酸性を好み、肥料をほとんど含まない場所で生育することが分かった。

今回調査した自生種の中には園芸品として有望視される個体もいくつか散見された。これらの植物体については、近藤（8）が提唱するような景観形成植物として利用する方法もある。これはヨメナやノコンギクなどの野生種を、田園地域や河川敷などに植栽する方法である。野生植物を保護しようとしても環境変化が著しい今日では、自生しやすい環境を整え保全していくことは容易ではない。このためミヤマヨメナも将来は、育成や繁殖する方法を検討する必要が生じるかもしれない。

ミヤマヨメナの花色は、咲き始めや開花後でやや異なるためにその表現が難しかったが、本調査では開花時の色で藤色と表した。これらの花色は、北部の調査地すなわち新潟県や福島県ではまさに藤色を呈したが、南部の調査地に移るにつれて花色が薄くなり、愛媛県に至っては白色であった。こうした結果には自生地の環境要因などが関係していると考えられるが、本調査範囲内ではこの点についてまでは言及できず、今後の課題としたい。

本植物を園芸用の草花としてみた場合、花の嗜好が洋花中心の現在にあっては、古風で地味な花と評価されよう。こうした花の評価の現状にあって、諸泉（12）は、元々日本人は淡泊で簡素な花を好むことから、生産者は感性に訴える風情ある自生種の栽培を行うべきだと述べている。また、今西（3）は花についての感じ方のアンケート調査で、日本人は野の雰囲気を感じられる花への愛着が極めて強いことを指摘し、生産者が花卉を選択する際の方向性を示し

ている。これまでの人と花との関わり合いの中で、花は観賞品であり、室内装飾用として位置づけられてきた。このため、好まれる草花は、生活習慣や住居の洋風化に伴って、人目を引く派手な洋花が中心であった。しかしながら、花の楽しみ方が観賞から自ら栽培する、いわゆる家庭園芸へと変化する中で、使用される草花や人が花に対する感じ方も変化してきている。最近の家庭園芸では自然志向の草花を使用する愛好者も多くみられる。こうしたことは、現代人が自然志向を望むものであり、野生種などのような草花から心のやすらぎや癒しといったようなものを感じ取っているのかもしれない。今後、ミヤマヨメナのような日本的風情のある植物は、まず種の保存が最優先されるべきであるが、一方で多くの人に再認識され、大いに利用されることも望まれる。

あとがき

本報告では、報告規定から図や表などの資料は割愛した。

引用文献

1. 麓 次郎. 1988. 四季の花事典. 八坂書房. 東京. p.288-292.
2. 深津 正. 1994. 植物和名の語源. 八坂書房. 東京. p.303-304.
3. 今西英雄. 1990. 花卉園芸の現状と今後のあり方. 園芸学会 花卉公開特別シンポジウム. 新花卉.タキイ種苗出版部. 大阪. 147:79-81.
4. 石田 明. 1986. ミヤコワスレ. 阿部定夫ら編集. 花卉園芸の事典. 朝倉書店. 東京. p.174-177.
5. 北村四郎. 1976. ジムナスター属. 最新園芸大辞典編集委員会編. 最新園芸大辞典 第2巻. 誠文堂新光社. 東京. p.931.
6. 北村四郎. 1978. ミヤコワスレ. 北村四郎監修. 朝日百科 世界の植物 I. 朝日新聞社. 東京. p.65-66.
7. 北村四郎. 1996. ミヤマヨメナ属. 佐竹義輔ら編集. 日本の野生植物 草本III 合弁花類. 平凡社. 東京. p.190.
8. 近藤哲也. 1995. 景観形成植物として有望な野生キク科植物. 新花卉. 168:36-40.
9. 小西国義. 1988. ミヤコワスレ. 花卉の開花調節. 養賢堂. 東京. p.119-129.
10. 松川時晴. 1983. ミヤコワスレのすべて. 新花卉. タキイ種苗出版部. 大阪. 117:54-64.
11. 松川時晴. 1994. ミヤマヨメナ属. 塚本洋太郎編著. 園芸植物大事典第2巻. 小学館. 東京. p.2376-2377.
12. 諸泉陽子. 1990. いけばな、フラワーアレンジメントを通して. 園芸学会 花卉公開特別シンポジウム. 新花卉.タキイ種苗出版部. 大阪. 147:82-83.
13. 日本植物分類学会. 1993. レッドデータブック 日本の絶滅危惧植物. 農村文化社. p.121-141.
14. 杉本順一. 1984. ミヤマヨメナ. 静岡県植物誌. 静岡県生活環境部自然保護課. p.573.
15. 塚本洋太郎. 1964. 原色園芸植物図鑑(II). 宿根草編1. 保育社. 東京. p.29.
16. 山本修之助. 1990. 佐渡の順徳院と日蓮. 佐渡郷土文化の会. 新潟. p.10-11.
17. 山本修己. 1996. かくれた佐渡の史跡. 新潟日報事業社. 新潟. p.128-129.